**聖霊降臨節第2主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年6月4日**

**「主の名を呼ぶ」**

**ヨエル書３章1節**

**3:1 その後／わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し／老人は夢を見、若者は幻を見る。**

**使徒言行録2章14～21節**

**2:14 すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。**

**2:15 今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているのではありません。**

**2:16 そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。**

**2:17 『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。**

**2:18 わたしの僕やはしためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。**

**2:19 上では、天に不思議な業を、／下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。**

**2:20 主の偉大な輝かしい日が来る前に、／太陽は暗くなり、／月は血のように赤くなる。**

**2:21 主の名を呼び求める者は皆、救われる。』**

**先週は今から約2000年前に使徒たちに聖霊が降り教会が誕生したことを祝うペンテコ**

**ステ礼拝でした。使徒たちにイエス様が約束してくださっていた聖霊が降り、他の国々の言葉で語り始めたのです。しかも語っている内容は「神の偉大な業」つまり福音です。使徒たちにとっては他の国々の言葉ですが、それを聞いていたユダヤ人たちにとってはそれぞれ自分たちの故郷の言葉で福音が語られているわけですから、それは非常に大きな驚きでした。**

**ガリラヤ生まれの使徒たちが、無知で無学なガリラヤ生まれの彼らが自分たちの故郷の**

**言葉など話せるはずがないのに、なぜか当たり前のように話している。その出来事は簡単には受け入れることができません。だからこそ「あの人たちは新しいぶどう酒に酔っているだけだ」と酒に酔ってたまたま話しているのが自分たちの故郷の言葉のように聞こえるだけだろうと苦し紛れの理由をつけて目の前の出来事を受け入れようとしなかったのです。**

**そんな中でペトロは他の11使徒と共に立ち上がり、大きな声で語るのです。それが本日と次週の礼拝で共に聴く、いわゆる「ペトロの説教」と呼ばれている箇所です。説教について説教をするというのは何か変な感じもするのですが、このペトロの説教は大胆さにしても内容にしても実に素晴らしい説教です。私たちは聖霊に満たされたペトロが、あのイエス様が捕らえられた時に逃げ出して「わたしはあの男のことなど知らない」と自分の身の可愛さにイエス様との間柄を否定したあのペトロが生まれて初めてする説教、それはキリスト教会最初の説教でもあります。そのペトロの説教に共に耳を傾けていきたいのです。そしてこのペトロの説教は主にユダヤ人に向けて語られますが、それは同時に私たちに向けて語られているのです。私たちは決して他人事ではなく、自分事としてペトロの説教に共に耳を傾けていきたいと思います。**

**「あの人たちは新しいぶどう酒に酔っているだけだ」聖霊に満たされたペトロは力強くまずこの言葉に反論をします。**

**「今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているのではありません。」（15節）朝の9時はユダヤ人たちにとって大切な時間です。それは朝の祈りの時間だからです。神聖な祈りの時間にぶどう酒を飲んで酔っ払うなんてことはありないですし、そもそもこんなに朝早くからぶどう酒を飲むはずがないでしょう、だからお酒の力でそれぞれの故郷の言葉で福音を語っているのではないことをペトロはまず力強く反論をするわけです。**

**では何の力で使徒たちはそれぞれの故郷の言葉で福音を語っているのかというと、それは旧約時代の預言者ヨエルが預言していたことが今実現したのだと語るのです。それが17節からの「神は言われる」で始まる鍵かっこの言葉です。今この言葉が実現している。だからこそ使徒たちはそれぞれの故郷の言葉で力強く福音を語っているのだというのです。**

**『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。』（17節）印象的なこの言葉は、本日私たちに与えられました旧約聖書ヨエル書3章1節、さらには2～5節の言葉の引用です。**

**ペトロは預言者ヨエルがかつて預言したこと、神様が霊を注いで下さる、それは男も女も若者も老人も奴隷の身分の者も全ての人に聖霊を注いで下さることによって神の言葉を福音を力強く語る。主イエス様が再び来て下さる輝かしい日の前に天変地異のような現象が起こる時でも「主の名を呼び求める者は皆、救われる」今がまさにその時なのだ。だからこそ、主の名を呼び求めよ、悔い改めて主に立ち帰れということをこれから始まる説教で力強く語るのです。**

**「主の名を呼ぶ」の「呼ぶ」は「呼びかける」という意味のある言葉です。「主の名を呼びかける」です。私たちが誰かに呼びかける時に「〇〇さん」とか呼びかけます。名字であったり名前であったり、お父さん、お母さんとかその人の立場で呼びかけたりします。親しい間柄だったら「〇〇くん」とか「〇〇ちゃん」と呼びかけます。すると相手は私たちの呼びかけに応えてくれます。そしてその人との会話が始まります。**

**では「主の名を呼びかける」つまりは父なる神様やイエス様に呼びかけるというのは何かと考えたら、それは祈りではないかと思います。「神様」とか「主よ」とか「イエス様」と呼び掛けて私たちはお祈りをするのです。先ほど私たちは「主の祈り」を共に祈りました。「天にましますわれらの父よ」で始まるこの祈りは父なる神様への私たちの祈りです。父なる神様に私たちが呼びかけているのです。そして私たちは主の祈り以外でも日々の歩みの中で祈ります。食事の前には食前の感謝の祈りをしますし、夜寝る前に祈る人もいるでしょう。朝起きてまず祈る人もいるでしょう「今日一日の歩みをお守りください」と祈るのです。また、時間を決めてでなくても神様に祈る、イエス様に祈りをささげて、願い事を祈ったり、誰かのために祈ったり、時には不平不満をぶつけることもあるでしょう。主の名を呼びかける祈りというのは神様やイエス様との会話ですからいつも心穏やかに祈るだけでなくて、文句や怒りをぶつけることがあるのは当然のことです。それはそれだけ神様やイエス様に信頼しているからです。祈るということは信頼があるから祈るのであって、信頼していない神様に祈ることはできません。**

**最近、ご高齢になられてなかなか会話が難しくなられた方を訪問させていただきました。若いころのお話やお仕事をされていたころのお話や熱心に教会に通われていたころのお話などを聞かせてもらいたいなと思っていたのですが、なかなか思うように言葉が出てこなくて、もどかしい思いをされているのだろうなと感じました。それでも私が「〇〇さん、お祈りしますね」と言って私が祈り最後に「アーメン」と言うと、その方も「アーメン」と言って一緒に祈ってくださったのはとても嬉しく思いました。その方は昔の習慣から意識せずに「アーメン」と言われただけかもしれません。けれども確かに「アーメン」と言って下さったのです。**

**たとえ、年を重ねて自分から祈ることは難しくなったとしても、一緒に祈る「アーメン」のその祈りに「アーメン」と祈りを合わせる、それは立派な祈りであり、信仰というものはそして神様への信頼というものは決してなくならないということを強く思わせられました。その「アーメン」と祈るお姿は信仰者の姿の証しであり、救われた者の喜びのお姿であり、そのお姿を通して「主の名を呼び求める者は皆、救われる」この御言葉のようにご家族もいつの日か主の名を呼び主に祈り信仰へと救いへと導かれてほしいなと思いました。**

**「アーメン」は「その通りです」という意味です。「その通りです。私の思いではなくて神様の御心がなりますように」との深い信頼の言葉です。そして何よりも祈りです。神様は私たちに素晴らしい祈りの言葉を与えて下さっているのです。アーメン。**